

大倉山公園と周辺散歩 —大倉喜八郎と朝鮮

堀 内 稔

はじめに

神戸市立中央図書館は大倉山公園の一角にある。そのため、大倉山図書館とも呼ばれるが、ここに特別コレクション室に青丘文庫が入っている。周知のように青丘文庫は、朝鮮近代史研究のための資料が日本で最も充実しているといわれる。それまでは故韓哲曇さんの私邸に置かれていた。阪神大震災で大倉山図書館の旧館がこわれ、新築されたのを契機に移転し、1997年6月から新たにオープンした。

この青丘文庫でほぼ毎月1回、在日朝鮮人運動史研究会と朝鮮民族運動史研究会が合同で開かれている。わがむくげの会の会員も、ほぼ半数がこれらいずれかの研究会に参加している。研究会のメンバーとしても古参であるなどの関係から、報告者が見つからない場合はすぐに穴埋めのための報告が回ってくる。先の9月12日の研究会も、「民族」で報告者の都合がつかないとして、大倉山公園のフィールドワークをすることになり、その案内役が回ってきた。

大倉山は大倉喜八郎の別荘があったところで、大倉喜八郎は朝鮮とも非常に関係の深い人物である。また戦前の大倉山には、初代兵庫県知事でもあった伊藤博文の銅像もあったという。しかし、それまで私はまったくそれらの事実を知らなかった。それ

で、2度ほど大倉山図書館に通い、付け焼き刃で大倉山公園の由来や大倉喜八郎について調べてみた。幸い図書館の郷土資料室には、神戸に関係が深い人物として大倉喜八郎に関する書籍が集められており、それらを参考にフィールドワークの資料をつくり（金英達さんにも大変お世話になつた）、当日の案内もふつつかながら無事役目を果たした。

ここでは、このフィールドワークにもとづき、大倉山公園を散策しながら大倉喜八郎と朝鮮、あるいは伊藤博文との関係に思いをはせた。

伊藤博文銅像の台座

図書館の左手にある階段を上ると、大倉山野球場がある。野球場には阪神大震災の仮設住宅が林立しているが、使われていないのか球場への入り口の門には錠がおりていた。球場を取り巻くようにしてやや広めの道があって、市民の格好のジョギングコースとなっている。

この道に沿って少し西へ歩くと、「いしづえ・とこしえに平和の塔」がある。説明によると、兵庫県における労働運動を中心とする社会運動に参加し、亡くなった人を称えるため1965年4月に建てられたも

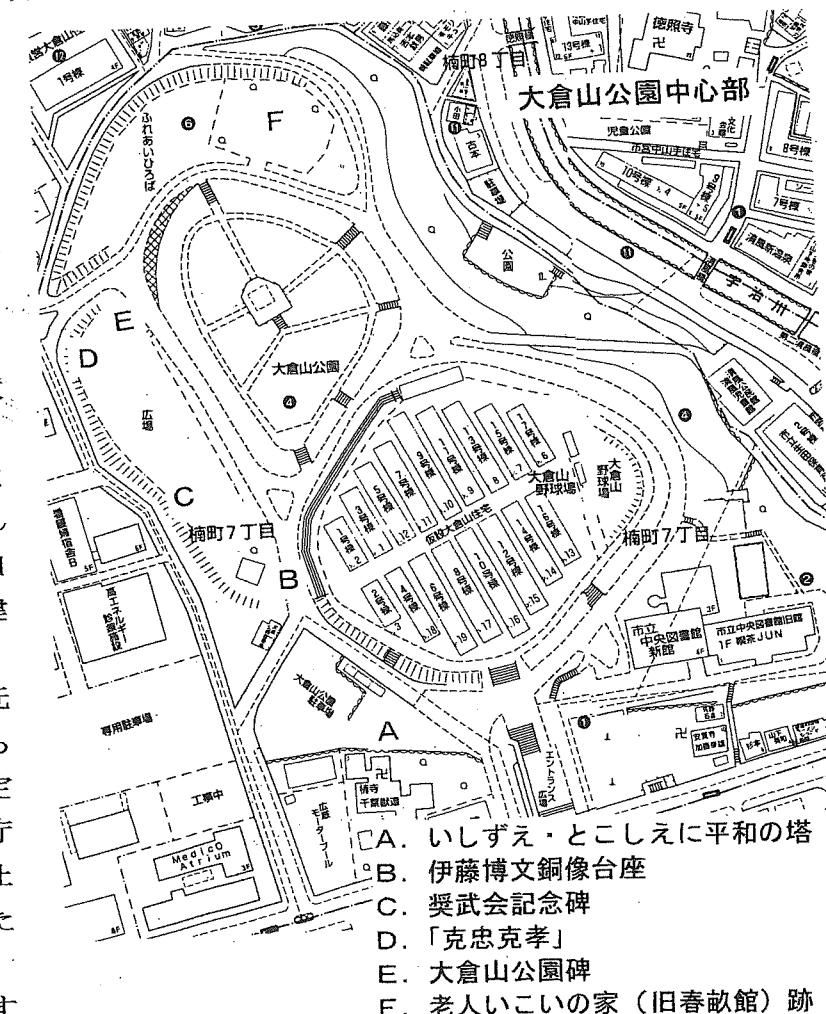
ので、当初は図書館の敷地内にあったが、1979年4月に現在の場所に移されたという。この碑について若干調べてみたが、詳しいことはわからない。ひょっとしたら朝鮮人活動家もと思ったが、青丘文庫の研究会メンバーで兵庫県の労働運動史にも詳しい高木さんによると、戦後の労働運動活動家だけだから朝鮮人はいないとの由。

さらに公園の奥へしばらく歩くと、左手に細長い広場、右手に大倉山公園の中心部がある。広場の一番手前に、金網で囲まれた大きな石の建造物がある。説明がまったくないから、この建造物が何であるのか、予備知識がなければわからないだろう。伊藤博文の銅像の台座で、銅像本体は太平洋戦争中に供出されて無い。

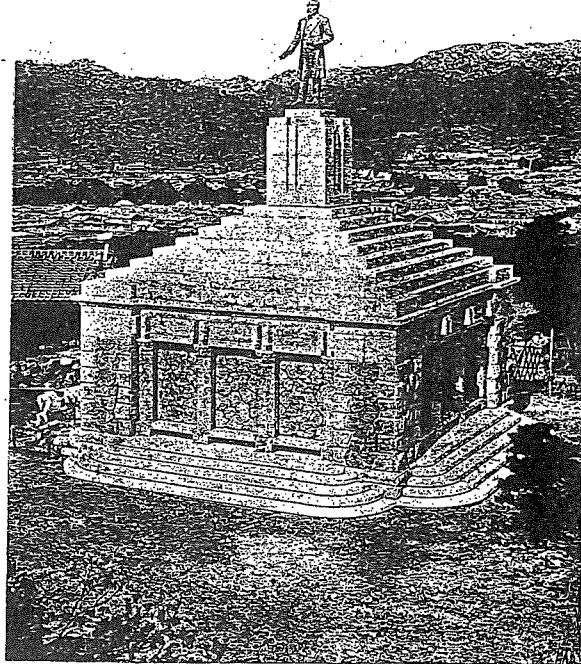
ともかく大きな台座である。鶴友会『鶴翁餘影』（1929年3月）によると、銅像建設のいきさつは次のとおりである。

伊藤博文が安重根によってハルビンで射殺された翌月である1909年11月、有志によって銅像建設の話が持ちあがった。建設地は、伊藤が明治元年に兵庫県知事に任命された関係から神戸に決定したが、その場所は県庁の玄関前やメリケン波止場、あるいは相生橋のたもとなど所説が出され、最終的に諏訪山に建設することに落ち着いた。

1910年春、大倉喜八郎が「満韓」旅行の際に神戸に立ち寄った。当時大倉山は安養寺山といい、ここに大倉喜八郎の別荘があった。この別荘は、伊藤博文が朝鮮の行き帰りに、「神戸第一の眺望且避暑地」としてよく宿泊したところもある。大倉は自ら銅像の建設予定地である諏訪山に登つてみて、「諏訪山は景色はいいけれども登らないと銅像が見られない。銅像は歐米の例の如く、多数の人が朝夕接見しやすい公園や市街の要衝に設置すべきだ」として、安養寺山荘の提供を申し出た。神戸市は大倉の厚意を受けることにし、1910年8月



兵庫県知事時代の伊藤博文



伊藤博文の銅像

『故伊藤公爵銅像建設頃末』(1911年10月)より

「市長は神戸市会に寄付行為を附議し、同時に大倉山公園と称することを議決し、工事を進行し」、1911年10月に除幕式を行った。

安養寺は墓地とともに今も公園の入り口に残っている。安養寺山の以前は広嚴寺山（こうごんじやま）といった。山の南麓に広嚴寺があったからだ。1580年花隈城攻めの池田信輝がこの山に砦を築いたという。大倉は1895年に、神戸鎮台跡地の安養寺山8千坪を墓地つきのまま購入した。ここに200坪の豪華な別荘を建てたのである。この別荘は伊藤博文の雅号をとって春畠楼と名付けられた。



慶應3年の伊藤俊輔

落合重信・有井基『神戸史話一近代裏話』より

神戸の総年寄を兵庫同様「名主」と改称して、新興の神戸を兵庫と同格に引き上げた。西の町（中突堤付近）に洋学伝習所を開いて洋学普及の糸口をつくり、県庁の機構を整備して県政の原型をつくった。

伊藤の遺したものに梅毒対策の病院と福原遊郭がある。梅毒対策の病院は、英国人の勧告を受け入れて寄付を募り、1869年3月に完成、翌4月から米国人医師を招いて治療を始めた。病院といつても一般の人には何のことかわからないという時代であった。後に梅毒病院、種痘所、医学校、薬学校などを生み出した神戸病院の始まりである。

福原遊郭はすべて吉原遊郭にならい、1868年12月に開業した。伊藤の遊郭づくりは、公娼をもって密淫売をなくし、痴情の紛争を避ける「必要悪」の考え方根ざしていたが、「淫売の権化、梅毒の化身」

などの非難も受けた。関係した女性は無数という伊藤の漁色の生涯を見れば、こうした非難もやむを得ないかもしれないという。

伊藤はやり手だったが、逆にやり手過ぎてねたまれ、反感と中傷によって1869年4月知事を罷免された。

大倉山公園碑

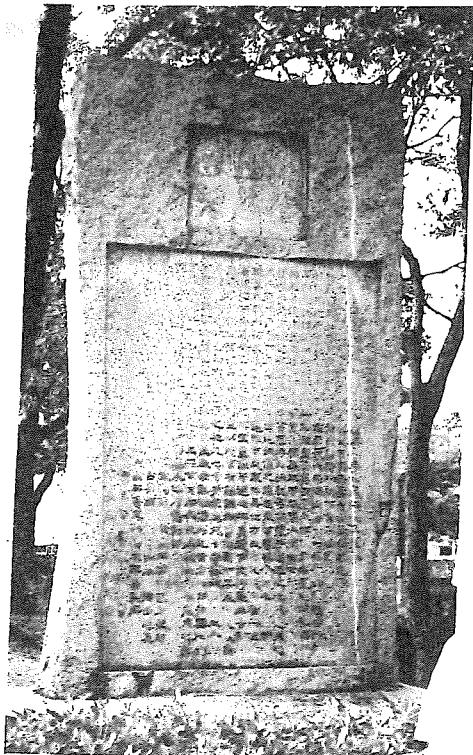
広場の銅像台座からさらに少し奥に入ったところに、大倉山公園碑がある。碑には漢文が刻まれているが、内容は先に書いたような銅像と大倉山公園ができた由来である。金英達さんは、「2時間ほどかけてこの碑文を写し取ったけれども、図書館の資料を調べると碑文の全文が載っていた」と苦笑していた。

この碑は銅像建立の後に神戸市が建てたもので、先の『鶴翁餘影』には次のように書かれている。

「銅像は既に建ち、安養山莊は大倉山公園と改称し、別邸の名を春畠館と題し、神戸市の貴賓接待所となり、以て今日に嚴存す。後神戸市は記念碑を建つるの議を定め、題字を有栖川威仁親王殿下に請ひ、文を東宮侍講三島毅翁に嘱し、日下部東作翁の揮毫を以て完成す」

碑の漢文はかなりの長文で、読みにくいものであるが、その中に次のような一節がある。

「翁恒受春畠伊藤公寵遇。公之経畧韓國也。途次 留宿于此。深愛賞其勝。既而視察滿洲。抵吐哈爾賓。暴薨於兜豎之手。天下惜之」（翁恒に春畠伊藤公の寵遇を受



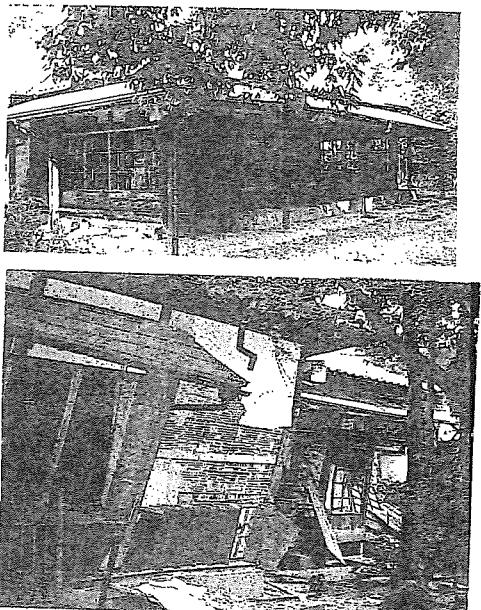
く。公の韓國を経略するや、途次しばしば此に留宿し、深く其勝概を愛賞す。既にして満州を視察し、哈爾賓に抵り、暴かに兎豎の手に薨ず)

翁とは大倉喜八郎、経略は攻め取ること、勝概は美しい風景のこと、兎豎は邪悪な小僧、すなわち安重根を指す。安重根は韓国では英雄であるが、この碑にあるような歴史認識は碑が建てられた当時も今も、あまり変わらないように思われる。

ところで春畠館（資料によつては春畠楼）は、戦災で焼失するまで春畠記念館として健在であったといつ。焼失をまぬがれた建物の一部なのか、戦後に再建されたもののかわからないが、春畠館は大倉山老人いこいの家として使用されていた。その場所は、図書館のある方の入り口を正面とすると、公園の一番奥にある。しかし春畠館は、昔の写真で見るかぎり銅像のすぐ脇にあつたように見える。戦後に移転されたのだろ

うか。この老人いこいの家として使用されていた春畠館は、阪神大震災で全壊し、その後解体撤去されて現在は更地になっている。写真で見る老人いこいの家は、そう大きな建物ではなさそうだが、更地になったところに立つてみると、その敷地はかなり広い。

1973年に大倉山公園は再整備されて、日本各県の樹木を集めた「ふるさとの森」がつくられた。春畠館が老人いこいの家として使われたのもこの時からである。

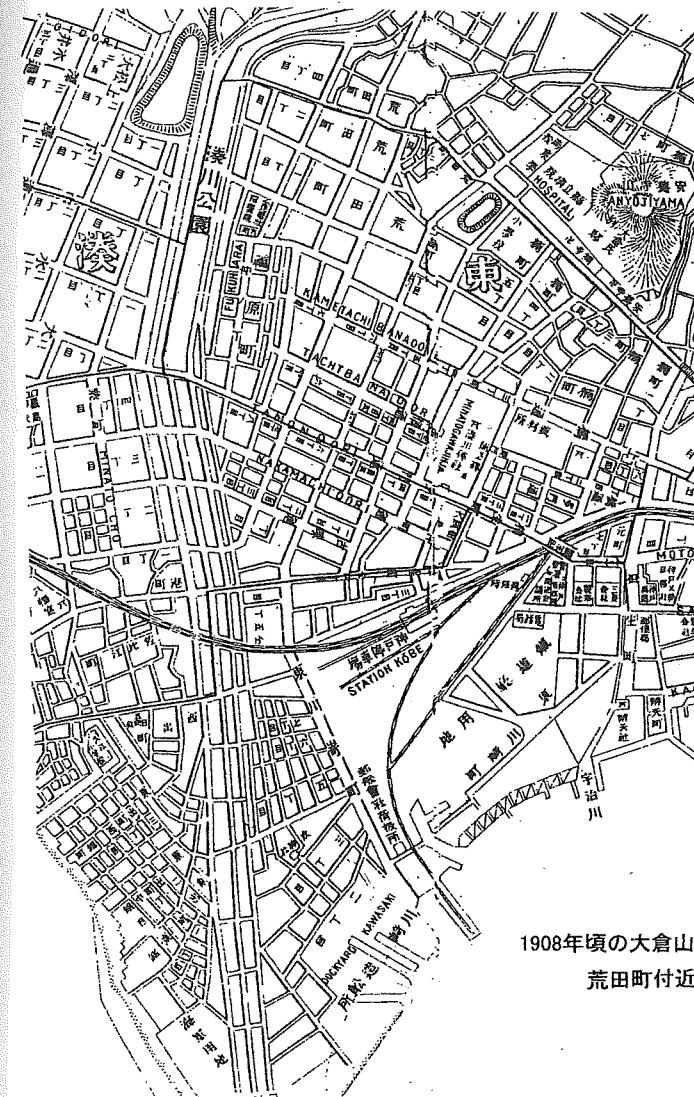


「新中央区歴史物語」より
↑
↓

そのほか公園内には、1912年建立の教育勅語下賜三十周年記念の「克忠克孝」の碑があり、また神戸文化ホール横の広場には、孫文の胸像や画家・橋本関雪の生家を示す碑などがある。

荒田町の朝鮮飴売り

大倉山公園の西隣が神戸大学医学部および神戸大学付属病院で、その西側から湊川



1908年頃の大倉山、荒田町付近

柏書房『日本近代都市変遷地図集成 大阪・京都・神戸・奈良』より

公園に至る一帯が荒田町である。この荒田町には「韓国併合」前後の時期に、朝鮮人飴売りが群居していた。朝鮮人飴売りは、旧韓末の政治亡命者やそれを追つて入り込んだ刺客を除けば、神戸に在住した最も早い朝鮮人集団だといえる。

朝鮮人飴売りはこの荒田町を拠点にして、親方を筆頭とする10数名のグループをつくり、繁華街へ出て飴を売り歩いた。神戸の現在の最大の繁華街は三宮であるが、1910年代のころは湊川公園や新開地

が繁華街の中心であったといわれる。新聞記事によれば「春先から真夏にかけて湊川遊園の棟の樹蔭ズラリと陣取った鮮人飴屋の群は……新開の都たる当市（神戸市）の奇観」（『神戸新聞』1917.9.16）であったという。湊川公園のすぐ隣が荒田町であるから、朝鮮飴売りにとって荒田町は非常に便利な居住地だったに違いない。

なお、1910年前後の朝鮮飴売りを報じた新聞記事によると、その居住地の圧倒的多くは荒田町であるが、神戸市東部の雲井通や若菜通といった地名も一部みられる。雲井通や若菜通といった葺合地区（現中央区）は、現在でも朝鮮人の集住地域であるが、そのルーツは1910年代後半の脇浜などの埋め立て工事である。しかし、それ以前から朝鮮人が居住していたのは興味深い。ちなみに、現在の神戸市最大の朝鮮人集住地域である長田地区は、1920年以降のゴム工業発達によって集住化が始まった。

荒田町は、今歩いても昔の飴売りを偲ばせるものは何も残っていない。おそらく戦災に遭つたからであろう。古そうな建物でも、戦後にできたと思われるものばかりである。朝鮮人のいにしえを求めての散歩には、やや物足りないところだ。

大倉山公園から荒田町を経て30分ばかり歩くと、神戸電鉄の線路に突き当たる。湊川公園の地下にある神戸電鉄の湊川駅は、朝鮮人労働者がつくつたものであるし、線路が地下から地上に出てすぐのところにある東山トンネルは、朝鮮人労働者が土砂

1999.9.26



大倉喜八郎

崩れで犠牲になったところだ。この東山トンネルのすぐ近く、会下山のふもとに、神戸電鉄（当時は神戸と有馬を結ぶ鉄道から神有電鉄といった）工事の犠牲者を追悼する意味から朝鮮人労働者のモニュメントが建立されている。神戸電鉄敷設工事朝鮮人犠牲者を調査し追悼する会が 1996 年につくったもので、毎年 10 月にこのモニュメントの前で犠牲者の追悼会が行われているという。

大倉喜八郎と朝鮮

ここで散歩から少し離れて、大倉山公園の由来となった大倉喜八郎について、とくにその朝鮮との関係を紹介してみたい。まず最初に、人名辞典から簡単に略歴を紹介すると次のとおりである。

大倉財閥の創設者で日本の成金第一号などといわれる大倉喜八郎（1837-1928 年）は、新潟県出身で 18 歳のときに江戸にて鏹節店員となった後、神田に銃砲店を開き、戊辰戦争で官軍に武器を売って大儲けするとともに、明治維新政府と密接な関係を持つようになり、日清、日露両戦争でも軍部の御用達商人として働いた。渋沢栄一と親交を結んで 1878 年東京商工会議所の前身である東京商法會議所を興し、東京電灯会社、帝国ホテル、内外用達会社などを創設して実業家としての先見性を發揮するとともに、大倉商業学校（現・東京経済大学）を創設するなど、社会事業も手がけた。日本の中大陸進出が積極化する明治後期から大正期にかけ、「満州」および朝鮮で各種事業を展開した。手がけた事業は多岐

にわたり、大日本麦酒、日本皮革、帝国製麻、東京毛織、大倉鉱業などがある。

大倉喜八郎と朝鮮との関係は、江華条約（1876 年）

によって開港した釜山で初めて貿易をしたことから始まる。その後鉄道の建設・経営、釜山港と鎮南浦（現在の南浦）の埋め立て、農場経営など、「韓国併合」前後の時期の朝鮮と深い関わりをもつた。

大倉喜八郎の生涯を記した書籍はいくつか出ている。大倉山図書館の郷土資料室にも何冊かあるが、朝鮮に関する部分をざっと見た限り、内容は大同小異である。大倉喜八郎述『努力』（実業之日本社 1916 年）など、基本となる資料が限られているからであろう。大倉山図書館には『努力』はないが、鶴友会『大倉鶴彦翁』（1924 年）などを参考にして大倉喜八郎の朝鮮における事業を紹介する。

①朝鮮貿易の開始

武力を背景に締結させた江華条約によつて釜山は開港したが、東京や大阪などの商人で朝鮮に渡つて貿易しようとするものはいなかった。大倉喜八郎はこれを遺憾として、また新任弁理公使花房義質や領事の近藤真鋤らから熱心に勧められたこともあって、国産ならびに舶來の諸雑貨を満載して釜山に渡つた。当時釜山には、主に対馬出身の日本人が 90 人ほど在留していただけであったという。

釜山に着いた大倉喜八郎は、東萊府の東仰寺で貨物一切を陳列して朝鮮人の客を呼

1999.9.26

んだ。西洋のバザー式、すなわち商品陳列館にならつて売りさばく方式は好評を博し、持ち込んだ商品はたちまちすべて売り尽くしたという。この時、正札販売を見た朝鮮人が非常に驚いたというエピソードが残っている。当時の朝鮮では一般の商売の場合、値段を秘密にしておくのが慣例であった。これでは商人が買って売ることはできないのではないか、という疑問に対し、大倉はたくさん買う人は割引率が大きく、それを正札販売すれば利益は上がるといって説いたという。

その後大倉は、日本各地の商人と連絡を取り合つて外国製品を輸入し、釜山の日本商人の地盤を開拓した。そのため、高麗丸という専用の西洋風帆船を造つて朝鮮航路に充てたり、釜山に商店を開いたりした。

②鉄道の建設と運営

日清戦争が始まった 1894 年、日本政府は韓国との間に「日韓暫定合同条款」なるものを結び、この中で京釜（ソウル-釜山間）、京仁（ソウル-仁川間）の両鉄道の敷設権を獲得した。しかし、財政的な事情で工事に着手できないまま権利の期限切れが迫ると、米国やフランスの資本家たちが利権獲得に動き出した。そこで日本政府はあわてて利権擁護に動き、三井、三菱、渋沢らには「京仁鉄道合資会社」を、大倉喜八郎と渋沢栄一には「京釜鉄道株式会社」を設立させた。その結果、京仁鉄道は 1900 年に、京釜鉄道は 1905 年に開通した。朝鮮縦貫の大動脈である両鉄道工事には、「鹿島」「大林」「間」「久米」といった業者とともに「大倉土木組」も参加した。

京仁、京釜の両鉄道には政府も多額の国家資金を注ぎ、実質的には経営も半官半民で

あった。1910 年の「韓国併合」で朝鮮総督府が発足してからは国有になり、二つの線は一本化された。

なお大倉土木組は、日清戦争中日本軍に参加して活躍、戦争終了後にはソウルの日本領事館改築工事を請け負うためにソウルに出張所を設けた。この工事は 8 万 8 千円の予算で 1895 年に始まり、29 年末に完成了。「韓国併合」後は京城府庁舎として使われた。大倉土木組は、現在の大成建設として受け継がれている。

③釜山港、南浦港の埋立

釜山は現在でこそ韓国第 2 位の大都会であるが、開港してしばらくは港といつても貧弱なものであったという。海岸には山が迫り、平地は少なく、港町も横に細長く伸びるしかなかった。そこで、海岸一帯を埋め立てる事業を計画した日本人がいた。しかし、資金の調達その他で着手できないでいたのを、以前から同じ考えを持っていた大倉喜八郎が資金を出し、資本金 35 万円の釜山埋築株式会社を設立して（1902 年）、大倉は自ら社長に就任した。

工事は大倉土木組が請け負い、2 期 6 年間で 14 ヘクタールほど埋め立てが完了した。大倉はこのうち 5 ヘクタールほどを公共施設用に提供した。その結果、京釜線の起点がこの造成地に移され、新しい釜山駅が誕生した。その他棧橋、税関、銀行、旅館などが次々にこの地に建ったという。

仁川の北方 180 km ほどのところに南浦という港がある。植民地時代は鎮南浦と呼んでいた。この港もすぐ後方に山が迫り、市街地の発展が遅れていた。そこで大倉は釜山に続いて埋め立て、造成工事を行い、78 ヘクタールほどを造成した。この広大な敷

地は、鎮南浦駅、平壌鉱業所貯炭場、鉄道引き込み線用地、一般市街地その他に利用された。

④農場経営

1903年大倉は、朝鮮大倉農場という会社を設立した。大倉は朝鮮の開発をはかるには、まず水田を開拓して、肥料の施し方や田んぼの耕し方を教える必要があると考えた。そこで全羅北道の群山に開設事務所を設けて、土地の買収を始めた。登記簿も土地台帳もないため、土地の売買は危険このうえない行為だったという。それでも、その後の4年間で2千300ヘクタール、関係町村135にまたがる農地を買収した。その後水利灌漑施設などに力を入れ、大倉農場が経営する水田は朝鮮第一の米産地になったという。

⑤善隣商業学校

大倉喜八郎の社会事業としては、現在の東京経済大学である大倉商業学校の経営が有名であるが、そのほかに大阪大倉商業(現関西大倉高等学校)、朝鮮の善隣商業学校がある。

善隣商業学校の前身は、1899年に公布された商工学校官制によって設立された官立商工学校である。校舎はソウルの明洞にあったが、1904年大倉喜八郎はこの学校の運営を任せられた。当時のお金で20万円を韓国政府に寄附したといわれる。

大倉は財団法人を設立、商科生5人と明洞校舎を引き受け、「実業界で活躍する素養を育てる」ことを理念とする善隣商業学校を設立した。以来善隣商業学校は、朝鮮の商業学校の名門校として、多くの人材を輩出した。日本人の卒業生の中では、音楽

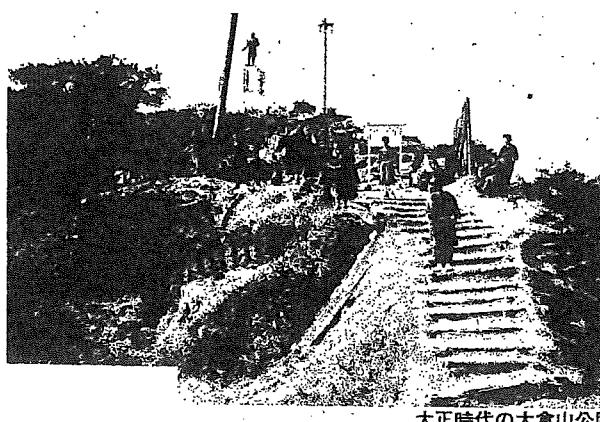
家の古賀政男、元社会党書記長の江田三郎などが有名である。現在は善隣情報産業高校となっている。

⑥「鬱陵島の占領」と抗議書

西南戦争が終わった1878年、榎本武揚、伊藤祐亨らがまず鬱陵島を占領しようとして大工や左官、井戸掘り人夫らを募集し、軍艦で鬱陵島に渡ろうと計画した。いよいよ実行という段になって韓国政府に知れ、日本政府に抗議がなされた。驚いた日本政府は、個人の行動は許さないとして、この計画を止めさせた。

この時大倉喜八郎は、時の韓国執政魚允中に抗議書を提出した。その主旨は「鬱陵島は貴國の領であるが、若し貴國の領ならば防備があるべきであるに、何等の備えはない。同島は元来日本領としての歴史もあるのである。今後とも備え無き場合は、吾等何時なりとも占領する。予め承知あり度い」(横山貞雄『人間大倉喜八郎』1929年)というものであった。

大倉が朝鮮、朝鮮人のためを思って朝鮮で数々の事業をしたとは到底考えられないが、この抗議書はそのことをよくあらわしているともいえる。



『生田いまむかし』より